

# 琉球大学学術リポジトリ

## 心理ストレスと対処行動に関する比較文化的研究の 展望

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): Stress, coping, culture 作成者: 嘉数, 朝子, 井上, 厚, 當山, りえ, Kakazu, Tomoko, Inoue, Atushi, Toyama, Rie メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1859">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1859</a>

# 心理ストレスと対処行動に関する比較文化的研究の展望

嘉数 朝子\* 井上 厚\*\* 當山 りえ\*\*\*

A review on the cross-cultural study of psychological stress and coping

KAKAZU TOMOKO\* INOUE ATSUSHI\*\* TOYAMA RIE\*\*\*

key word : Stress, coping, culture

## 要 約

本論は、心理ストレスと対処行動に関する比較文化的研究の文献検索システム PsycLIT を用いて論文概要を展望したものである。整理の観点として Aldwin (1994) が挙げるつぎの4点、①ストレッサーのタイプ、②ストレスフル度の査定、③対処方略の選択、④文化が提供する社会的資源を使って個々に比較考察した。最後に沖縄県における心理ストレスと対処行動の研究にむけて、環境要因や個人内要因の点から検討した。

### 1. はじめに

本論は、心理ストレスと対処行動に関する比較文化的研究の概要を展望したものである。布施・小杉 (1996) によれば心理ストレスと対処行動に関する研究の歴史は過去30年に遡り、1967年には既に登場している。彼らによれば、1970年代には688編、1980年代には3023編、1990年代 (1994年

現在) には3729編に上っている。

心理ストレスについての比較文化的研究は、文献検索システム PsycLIT を用いて論文数を求めると、表1に示されるように80年代後半から登場し90年代に増加している。

下位領域には二重文化や異文化適応、文化とパーソナリティ、仕事、戦争・暴力などがある。対象とされた国は米国、メキシコ、プエルトリコ、

表1 STRESS, COPING, CULTUREで、1970～現在までPsycLITで検索した結果

	二文化併存	異文化	人格・対処のタイプ	仕事	戦争	暴力 (子供・妻・老人)	アフォーダ 依存	人格・対処タイプ	展望	計
1990-1995	2 不1、子1	10 成3、不1、大5、青1	3 成1、不2	3 成2、不1	3 大1、子1	3 不3	0	12 成3、不4、大3、青1、子1	7	24
1985-1989	4 成1、不2、青1	6 老1、成3、不1、大1	2 成1、不1	7 成6、大1	1 不1	0	1 成1	6 老1、成3、不1、大1	6	20
1980-1984	2 不2	1 不1	3 不3	0	1 成1	0	0	3 不3	3	9
1975-1979	0	3 成3	1 成1	0	0	0	0	1 成1	0	4
1970-1974	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) 年令の略記：不=不明、老=老人、成=成人、青=青年、大=大学生、子=子供

アイルランド、イスラエル、東西ドイツ、オーストラリア、台湾、中国、インド、日本などであった。対象者は老人、成人、大学生、思春期、児童と生涯発達の全過程にわたっている。

## 2. 文化人類学からの批判：比較文化的研究が少なかった理由

心理的ストレスおよび対処行動に関する研究に対する文化人類学からの批判として、文化人類学者は対処行動は主として個人の属する文化の関数として考えるのに対し、心理学では対処行動は個人の人格や社会的文脈の関数として考えがちということが挙げられる。

Lazarus & Folkman (1984, 8章 個人と社会)においても、個人の適応とストレス対処行動の関係において社会・文化の重要性については指摘されていた。彼らは、社会階層や性、年齢などによる対処行動の違いについて実証的な成果を紹介し、社会的支援や社会的変化についても言及していた。しかし、この段階では、ストレスおよび対処行動における社会・文化的影響の重要性は認識されているものの、組織だった研究とはいえないという印象であった。特に文化を独立変数として扱った研究は少なく、ストレスと対処行動につい

ての心理学的研究では社会文化的影響を軽視しがちであった。

## 3. 近年増加した理由：多文化カウンセリングの需要の拡大

Slavin et al (1991) は、研究の増加の理由として、異文化間の移動が多くなり、カウンセリングにおいても文化の問題を抜きにしては治療効果をあげることができなくなったことをあげている。図1に彼のモデルを示す。図1の上半分はLazarus & Folkman (1984) のストレス対処のプロセスモデルで、下半分に文化の次元が追加されている。

## 4. Aldwin (1994) の分類

検索した文献を整理する視点としてAldwin (1994) を参考にした。彼女は、文化がストレスおよび対処過程に影響する面として、次の4つを挙げている。

- ① ストレッサーのタイプ
- ② ストレスフル度の評価
- ③ 対処方略の選択
- ④ 文化が提供する社会的資源

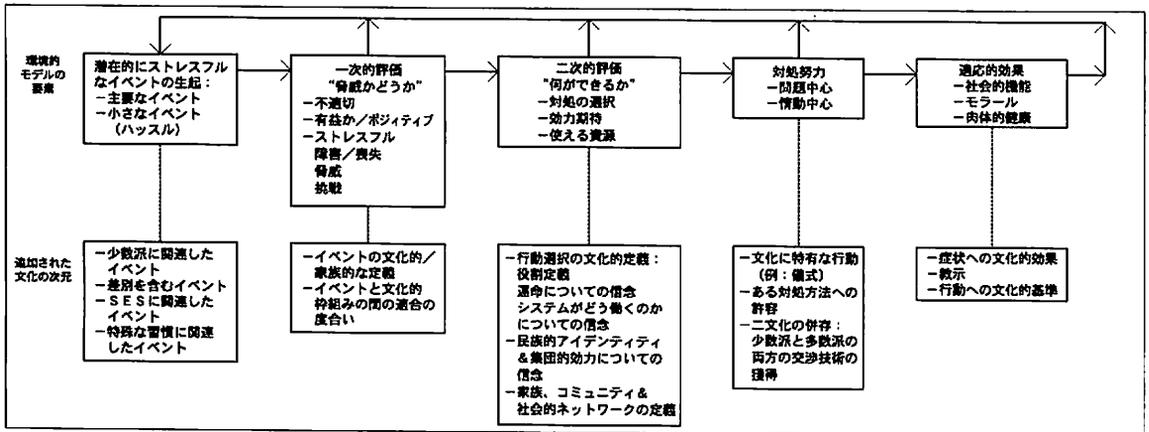


図1 ストレス過程の多文化モデルの提唱

Slavin, L.A. et al 1991 Toward a Multicultural Model of the Stress Process, *Journal of Counseling & Development*, 70, 156-163.

彼女は、ストレスと対処行動と適応に関する社会文化的モデル（図2参照）を提案し、次のように主張している。文化的要求と資源は、状況的要求と個人的資源の両方に影響し、交互にストレスの評価に影響する。さらに、文化的信念や価値は、個人の信念や価値に対してだけでなく他者の反応にも影響し、ストレスの査定にも影響する。

この項では、彼女の上述の4つの側面について、関連する研究を紹介していこう。

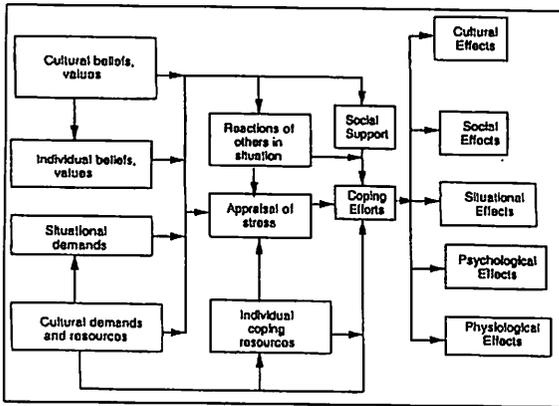


図2 ストレス、対処行動、適応の社会文化的モデル (Aldwin,1994)

### ① ストレッサーのタイプ

標準的なライフイベントも文化によって異なることはよく知られている。例えば、割礼のような厳しい試練に耐え克服するような伝統的な通過儀礼は、近代化された国ではあまりみられない。

一方、定年退職は現代の日本や欧米などでは人生の出来事の中でも最も重大なイベントの1つといえるが、この歴史もさほど古いものではない。第2次大戦以降の、比較的新しい制度であるといつてよい。

入学試験などは、日本や韓国などでは重要なライフイベントであるが、そうでない社会もある。何が重要さを決定するのであろうか。Arsenian & Arsenian (1948) は tough vs easy な文化を区別している。前者は目標の次元が制限（学業の成功、物質的豊かさなど）されているので、競争が激化しやすく、青年へ負荷される圧力は増加する。米国や日本がこの tough な文化の好例である。後者は価値が多数（物質的豊かさ、結婚、政治的力、精神的指導力など）存在する文化で、子どもに与

える教育期待などの圧力はそれだけ弱まるから、競争も緩やかになる。タヒチやミクロネシアなどの南洋諸島が、easy な文化の例である。

医学的研究において Holmes & Rahe (1967) の生活変化尺度以来、ライフイベントは多くの国で比較検討されている（宗像, 1991）。先進国の中では、ライフイベントの重要度は驚くほど共通していたという。これらの研究対象のほとんどは成人で、子供を対象としたものは少ない。

嘉数・井上・中澤・當山・島袋 (1997) は児童のストレスフル・ライフイベントとソーシャル・サポートについて、小学校3年生と5年生を対象として沖縄県と千葉県との比較研究を行った。主な結果は以下の通りであった。イベントの体験総数では沖縄県のほうが多かった。項目ごとにどちらの地域の体験率が多いかを比較したところ、多くの項目で地域差が顕著であり、沖縄県のほうが体験率の高い項目が多く、否定的な項目（父親の単身赴任、成績が下がったなど）も多かった。ソーシャル・サポートとは、両親、兄弟、友人、先生などのサポート源から、情緒的サポート（なぐさめてくれる、喜んでくれる）や知的サポート（手伝ってくれる、どうすればいいか教えてくれる）などの援助を受ける量のことであるが、情緒的サポートは沖縄県の子どもが千葉県の子どもよりも多く受けており、サポート源別では沖縄県の子どもが兄弟からのサポートを受ける量が多かった。

### ② ストレスフル度の評価

普遍的なイベントでもストレスフル度の評価が文化によって違うことがある。例えば、若者（特に娘）の性行為に対する許容度も、厳しい文化と寛容な文化がある。厳しい文化の例はエジプトなどの国で、死をもって償わせることすらある。寛容な文化の例はタヒチなどがある。

障害児が生まれたことに対する解釈にも文化差がある。例えば、事故（ノルウェー）と解釈するか、神の罰（ボツワナ）と解釈するかによって、障害児を持つ親の苦悩は変わってくる。親にとって、後者はより困難な状況である。

Aldwinの引用した研究には文化人類学的研究が多く、われわれの検索の結果でも心理学的実証的研究は少なかった。北村 (1995) は、ライフイベントのストレス度の評価は個人によって異なるの

で、質問紙にたよるだけでなく、面接法によるべきであると主張している。

### ③対処方略の選択における社会文化的影響

#### ・対処行動の定義

対処行動の定義は研究者によって様々であるが、Lazarus & Folkman (1984) は「個人の資源に負荷をかけたり、それを超越するような環境のないし内的要求や葛藤をなんとか処理するための認知的・行動的努力」と定義している。彼らによれば、対処方略の選択は、各人がストレッサーに対する認知的評価を行った後に、その評価に基づいて行われる。したがって、状況に対する認知的評価が異なれば選択される対処方略も違ってくる。

#### ・対処行動の分類

Lazarus & Folkman (1984) は対処行動を問題中心的対処と情動中心的対処の2種に分類している。前者はその状況で生じている問題を解決しようとする試みで、後者はストレスフルな状況で喚起された不快な情動を鎮め調整しようとする試みのことである。

ここでは、この2種の対処行動と文化に関連した研究成果をみていこう。心理的ストレスと文化に関する研究の中では、この領域が最も多い。ここでの研究成果を要約すると次のようになる。社会文化的集団はストレッサーの起源についての共通の信念だけでなく、対処手段（情動中心、問題中心）の適切さについての信念も共有している。これらの信念は状況特殊的である。つまり、文化によって適応的な対処方略が異なる。さらに所属する文化と逆行した対処をしようすると、たとえそれが他では有効であってもストレスを増す。多民族国家である米国では、二重文化や異文化適応の研究が多い。二世などは2種の異なる対処方略のレパートリーをもっており、相手により適宜変えているという報告もある。

#### a) 文化と情動中心的対処

ストレスに対する情緒的反応を表現するか統制するかの次元も文化によって変化する。例えば悲嘆の表現は米国では人前ではみせないものでプライベートな場でのみ許されるのに対し、フィリピンやその他の多くの国では、公けに表現することが許容される。

対処行動についての研究領域では、痛みへの対処（表現）における文化差の研究が多くなされている。Zborowski (1952) は、痛みに対する人種の差異に関する最初の研究を行った。イタリア人やユダヤ人は痛みに対する反応をおおげさに表出したが、アイルランド人は痛みをこらえ、情動表出を最小限にしようとした。彼は、人種間の行動的な差異は、明らかに、痛みの制御と情動表現の受容性における文化的信念の違いであると結論づけている。

#### b) 文化と問題中心的対処

一般に、問題中心的対処はストレスフルな状況を統制しようとする試みとして定義されるので、Rotter (1966) 以来、何百という統制と心理的適応に関する研究がある。したがって統制やマスタリーに焦点づけた対処行動についての比較文化的研究も多い。

#### ・能動性 vs 受動性

Diaz-Guerrero (1979) は、メキシコの子どもが米国の子ども（能動的）よりも、受け身で自分を変化させる対処行動をとると報告している。米国の子どもは、より積極的な対処行動に対して高い評価を受けているという。

自己イメージ尺度を用いた国際比較研究で、Offer (1981) は、米国の青年がアイルランドやオーストラリアの若者よりも能動的な対処行動を示すという。興味深いことに、イスラエルの若者が最も能動的で、マスタリー志向であった。これらの研究は人格検査から対処行動を推測したにすぎず、直接に特定のストレスフルな状況で測定したものはなかった。

最近の対処行動とバーンアウト（燃えつき）との関連を検討した研究 (Etzin & Pines, 1986) で、積極的対処を示すイスラエル人は非常にストレスフルな専門職においてバーンアウトが少ないことに貢献していると結論している。

#### ・その他の次元

前述の研究の中で取り上げられた統制の次元は、西欧的分割法といえるもので、「外的 vs 内的」、「受動的 vs 能動的」などであった。Reynolds (1976) はこれらの分割は単純すぎるとして、より複雑な見解を示唆している。彼は、好ましい行為の方向性の内在する問題解決への「西

欧的 vs 東洋的解決」の次元のほうがより有用であると主張している。人間の現象的な真実とは人の内的状態と客観的真実の産物である。西欧では客観的真実を変える活動が受け入れられる。しかし、東洋人が単に受け身であきらめが良いだけではないことを強調している。これらは単に方略的なものであって、ある種の問題は間接的で内的に操作したほうがよいこともあると述べている。

・「出来事の生起への責任性 vs 解決への責任性」

抑うつに対する学習性無力感理論を検証するなかで、Coyne, Aldwin, Lazarus (1981) は、慢性的うつ病者は、そうでない者よりも環境を変えようとしにくいことを見出した。対照的に、抑うつ病者は統制しにくい状況を受け入れにくく、制御できない状況を統制しようとする傾向があった。抑うつ病者は、状況が統制しやすいかどうかを認知する能力があきらかに低かった。したがって、物事が上手くいかないことに対して、自分自身を恥じるようになりがちである。運命（カルマなどとよばれる）に対する文化的信念は、受け身になるのを導くのではなく、過度の失敗や無力の感覚や抑うつから個人を解放する目的もある。

個人が属する文化とは異なった対処方略は結果的にストレスを大きくすることもある。台湾のHwang (1979) は、経済的地位が低い層は自己確信が低く、運命論に特徴づけられた対処することを見出した。社会的階層にかかわらず、伝統的価値、協調的な対処方略を示す人はストレスフルでなかった。一方、自己主張的で達成志向的な対処をする者は、対人関係でのストレスや身体症状も多かったという。Shek & Cheun (1990) は、文化が自己（対処の内的位置）に信頼をおく文化と他者（対処の外的位置）により信頼をおく文化の2種に分けられると主張している。

Kashima & Traiand (1986) は、Heider (1958) の古典的定義の「個人主義 vs 集団主義」の次元を対処行動に応用した。彼らは、self-serving bias（以下ssbと略記する）を、「人は成功を自分自身に、失敗を他者に帰属する傾向」と定義し、ssbは個人主義の文化でのみあてはまると予想した。彼らが日本人と米国人の大学生で実験したところ、米国人は曖昧な事態でのみssbを示し、曖昧でない事態では両群は同じ帰属をしていた。

したがって彼らの仮説は部分的にしか支持されなかったことになるがこれから、状況的文脈によって文化の影響が変化させられたことがわかる。

興味深いことに、二重文化を持つ個人（二世など）は、2つの分離した対処レパートリーを持っており、相手によって変えている。例えばKiefer (1974) は、日系アメリカ人の二世が、問題状況の相手が日系人か、他の文化のグループかによって異なった行動のルールを使用することを見出した。

積極的で問題焦点型の対処を用いる個人の中でも、直接的な行為のタイプの好みは文化によって異なっている。Caplovitz (1979) は米国の様々な人種の中での、インフレへの対処における文化差を検討した。その結果、例えば、白人は生活費を減らす対処をとるのに対し、黒人は安い品をさがす、スペイン系は家族や隣人と分け合うという対処を好んだという。

要約すると、社会文化的集団はストレスの起源についての共通の信念だけでなく、対処手段（情動中心、問題中心）の適切さについての信念も生成している。これらの信念は状況特殊である。さらに一般的な文化と逆行した対処をしようとすると、たとえそれが他所では有効であってもストレスを増すことがある。

#### ④文化が提供する社会的資源

多くの文化で問題解決や緊張低減のために文化的・社会的制度や機関が提供されている。例えば、援助システムの例として葛藤解決のための法体系の文化比較をしてみよう。欧米では量刑は裁判官が決定するのに対し、メキシコやサウジアラビアでは原告も影響力を持つという。

また、それぞれの文化は儀式的なアドバイスを提供する。宗教家、専門家（心理学者、ソーシャルワーカー）、アルコール依存症の相互補助団体などがアドバイスの提供者となる。「占い」も一種のフォークカウンセラーであるといえる。

#### ・Aldwinの要約

ストレスと対処についての心理学的研究では社会文化の影響が無視されてきた。Aldwinは、文化が個人が経験するストレスのタイプに影響すること、また評価過程にも影響することを例証した。さらに、ある文化では特定の対処行動が他

所より適切であるという。最後に彼女は、個人と文化は双方向の関係であると主張している。

## 5. 沖縄県における心理ストレスと対処行動の研究にむけて

ここまでの節では、主に欧米の論文を中心として、文化とストレスに関する研究を紹介してきたが、国内におけるこの領域の研究は少ない。日本人の外国での仕事や留学での適応といった研究(竹中,1993)はいくつかあるが、日本内での地域比較研究はほとんどない。

その中で、前述の嘉数ら(1997)の沖縄県を対象としたストレスフル・ライフイベントの地域比較研究の先駆的意義は大きい。

地理的条件や歴史的背景の異なる沖縄県においては、子どものストレス要因やストレスを軽減する社会的な支援要因が他県とは異なるであろうと予測される。特に沖縄県における離婚率、母親の就労率、失業率などの高さは、子どものストレス源として大きな影響を与えていると思われる。またその一方で、家族や、家庭外での親族や伝統的地域共同体からの支援(サポート)は豊かに得られていると予想される。

今後の沖縄県でのストレス研究の方向性として、環境要因と、個人内要因の2側面から考えていくことが可能であろう。環境要因としては、先に述べたように、ライフイベントやソーシャルサポートが挙げられるだろう。

個人内要因として、対処行動、統制感および原因帰属における個人差が重要だろう。対処行動については、Aldwinの分類の③で述べたように、文化差が顕著であると予想される。統制感や原因帰属の重要性に関しては次のような文献から指摘できる。

### ・ライフイベントと統制の位置

Hobfoll(1988)は、個人的属性とストレス耐性の関連を展望する中で、統制の所在(Locus of Control; 以下LOCと略する)とストレス耐性に関する関係の研究を紹介している。Jonson & Sarason(1978)は、ストレスフルなライフイベントとLOCと不安の関連を大学生を対象として検討した。その結果、外的帰属をする者(以下Eと略す)

のみがライフイベントによって有意に負の影響を受けることが明らかになった。内的帰属者(以下Iと略する)は自分の運命を単に外的要因によって決定されるものとはみなさず、自分を外的な環境を克服できる可能性があるものとしてみならず、Eは、逆にライフイベントを負の結果を導くものとしてみる、なぜなら自分は強力な外圧に対抗できないと考えるからである。どんな種類のライフイベントがマスターの志向と結びついているかはほとんど分かっていない。Lefcourt et al(1981)は、過去に経験したストレスの影響はIの方では緩和されていたが、EもIも、最近経験したライフイベントによっては負の影響を受けた。この結果は次のように解釈できる。負のライフイベントはだれにとっても直後は衝撃を与える、しかし、個人差要因はどれくらい長くその有害な影響が現れるかに影響するであろう。

### ・統制感の文化差

ドイツのMax Planck研究所のOettingenら(1994)は、旧東西ドイツの子どもの統制感を比較研究し、明らかに両者に差異を見出している。この差異は、両国が民族・文化を同じくしながら、長期間にわたって異なる社会体制や教育システムの下にあったことによると考察された。米国やロシアなどを対象にした比較研究においても、統制感の発達におよぼす文化的・社会的背景の影響が明らかにされている。日本における沖縄県の場合も、地理的条件や歴史的背景の違いから本土とは統制感が異なることが予想される。東京都(唐澤ら,1995;真島,1991)と沖縄県(島袋・井上・嘉数ら,1995)の結果を比較してみると、沖縄県の児童の特徴として、学業達成のためには外的手段(運、教師)を内的手段(努力、能力)よりも重要視する傾向がみられた。著者らは、日本本土と沖縄県との関係と旧東西ドイツの関係に、ある種の類似性があるのではないかと予想している。

### ・統制感と対処行動

Lopez & Little(1996)は、児童の対処行動が統制感と不安の間を媒介するという仮説をたてた。結果は、仮説は部分的にしか支持されなかったが、自己保有感は、向社会的対処を増加させ、反社会的対処を減少させ、不安を減少させることが示された。彼らは、5つの対処行動を測定でき

る文化差に敏感な尺度（BISC：Behavioral Inventory of Strategic Control）を開発し、国際比較研究を続行中である。

・今後の個人内要因の方向性

上述のように文献検索の結果、特に児童におけるストレスへの対処行動に関する研究は国内ではほとんど行われていないが、外国では既に多数の研究が行われており、特に文化の違いによって適応的な対処行動の種類が異なること、他で有効な対処行動であっても伝統的価値にそぐわない対処行動は、むしろ対人関係でのストレスや身体症状をもたらすことが多いことが報告されている。また、対処行動の背後にはLopez & Little (1996) が仮説しているように統制感が機能していると思われる。今後、沖縄県におけるストレス研究には、環境要因のみならず、対処行動と個人内要因としての統制感との関連を検討していく必要があるだろう。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、武庫川女子大学大学院の祐宗省三教授ならびに千葉大学教育学部の中澤潤助教授の貴重なコメントを頂きました。記して感謝いたします。

引用文献

Aldwin,C.M. 1994 *Stress, Coping, and Development*. New York : The Guilford Press.  
 Allen,J. 1986 Achieving primary prevention program objects through culture change systems. *J.Primary Prevention*, 7,91-107.  
 Arsenian,J., Arsenian,J.M. 1948 Tough and easy cultures:A conceptual analysis. *Psychiatry*,11, 377-385.  
 Caplovitz,D. 1979 *Making ends meet : How families cope with inflation and recession*. Beverly Hills,CA : Sage.  
 Costantino,G., Malgady,R.G.&Rogler,L.H. 1988 Folk hero modeling therapy for Puerto Rican adolescents. *Journal.Adolescence*, 11,155-165.  
 Coyne,J.,Aldwin,C. & Lazarus,R.S. 1981 Depression

and coping in stressful episodes. *Journal.Abnormal Psychology*, 91,439-447.  
 Cross,S.E. 1995 Self-construals,coping,and stress in cross-cultural adap tation. *Journal.Cross-Cultural Psychology*, 26,673-697.  
 David,F.L. & Todd, D.L. 1996 Children's Action-Control Beliefs and emotional Regulation in the Social Domain, *Developmental Psychology*,32,2, 299-312.  
 Diaz-Guerrero,R. 1979 The development of coping style. *Human Development*,22,320-331.  
 Elias,M.J. 1989 Schools as a source of stress to children : An analysis of causal and ameliorative influences. *Journal.School Psychology*,27,393-407.  
 Etzion,D.&Pines,A. 1986 Sex and culture in burn-out and coping among human service professionals : A social psychological perspective. *Journal. Cross-Cultural Psychology*,17,191-209.  
 Fontaine,G. 1986 Roles of social support systems in overseas relocation : Implications for intercultural training. *International Journal of Inter cultural Relations*,10,361-378.  
 Oettingen,G., Little,T.D., LindenBerger,U. & Paul B.B., 1994 Causality,Agency,and Control Beliefs in East Versus West Berlin Children : A Natural Experiment on the Role of Context. *Journal. Personality and Social Psychology*,66,579-595.  
 Heider,F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York : Wiley.  
 Hobfoll,S.H. 1988 *The ecology of stress*, New York : Hemisphere Publishig,Co.  
 Holmes,D.& Rahe,R. 1967 The Social Readjustment Rating Scale. *Journal.Psychosomatic Research*,11, 213-218.  
 Hwang,K.K. 1979 Coping with residential crowding in a Chinese urban society : The interplay of high-density dwelling and interpersonal values. *Acta Psychological Taiwanica*,21, 117-133.  
 Johnson,J.H. & Sarason,I.G. 1978 Life stress, depression, and anxiety. *Journal.Psychosomatic Research*,22,205-208.  
 嘉数朝子・井上厚・中澤潤・當山りえ・島袋恒男

- 1997 児童のストレスフル・ライフイベント尺度の地域比較研究 —沖繩県と千葉県の場合— 琉球大学教育学部附属実践センター紀要, 5, 73-80.
- Kashima, Y. & Triandis, H.C. 1986 The self-serving bias in attributions as a coping strategy : A cross-cultural study. *Journal. Cross-cultural Psychology*, 17, 83-97.
- 唐澤真弓・Todd, D.L.・宮下孝広・真島真理・東洋 1995 学習意欲と原因帰属に関する国際比較研究(2) 発達研究, 11, 79-86.
- Kiefer, C. 1974 *Changing cultures, changing lives*. San Francisco : Jossey-Bass.
- 北村俊則 1995 疫学調査における心理社会的ストレス研究 ストレス科学, 10, 67-69.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal, and coping*. New York : Springer.
- Lefcourt, H.M., Miller, R.S., Ware, E.E. & Sherk, D. 1981 Locus of control as a modifier of the relationship between stressors and moods. *Journal. Personality and Social Psychology*, 41, 357-369.
- Liang, B. & Bogat, G.A. 1994 Culture, control, and coping : New perspectives on social support. *American Journal. Community Psychology*, 22, 123-147.
- 真島真理 1991 学校文化と子どもの動機づけに関する発達研究 発達研究, 7, 73-103.
- Miller, T.W. 1995 Stress adaptation in children : Theoretical models. *Journal. Contemporary Psychotherapy*, 25, 5-14.
- 宗像恒次 1995 ストレス解消学 小学館
- Negy, C. 1995 Coping and Culture : A Research note on Diaz-Guerrero's Theory. *Psychological Reports*, 76, 680-682.
- Offer, D., Ostrov, E. & Howard, K. 1981 *The adolescent : A psychological self-portrait*. New York : Basic Books.
- Peacock, E.J. & Wong, P.T.P. 1996 Anticipatory stress : The relation of locus of control, optimism, and control appraisals to coping. *Journal. Research in Personality*, 30, 204-222.
- Radfoed, M.H., Mann, L., Yasuyuki, O. & Yoshibumi, N. 1993 Differences between Australian and Japanese students in decisional self-esteem, decisional stress, and coping styles. *Journal. Cross-Cultural Psychology*, 24, 284-297.
- Reynolds, D.K. 1976 *Morita psychotherapy*. Berkeley : University of California Press.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 Whole No. 609.
- Shek, D.T.L. & Cheung, C.K. 1990 Locus Of Coping in a sample of Chinese Working Parents : Reliance on self or seeking Help from others. *Social Behavior and Personality*, 18, 327-346.
- 島袋恒男・井上厚・嘉数朝子・前原武子 1995 沖縄の児童の進路発達と学習の原因帰属に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 46, 101-114
- Slavin, L.A., Rainer, K.L., McCreary, M.L. & Gowda, K.K. 1991 Toward a multicultural model of the stress process. *Journal. Counseling and Development*, 70, 156-163.
- Sorensen, E.S. 1994 Daily stressors and coping responses : A comparison of rural and suburban children. *Public Health Nursing*, 1, 24-31.
- 竹中晃二 1993 米国における海外赴任者のストレスに関する研究 健康心理学研究, 6, 12-17.
- Tseng, W-S. 1985 Cultural aspects of family assessment. *International Journal of Family Psychiatry*, 6, 19-31.
- Vazquez, L.A. & Garcia-Vazquez, E. 1995 Variables of success and stress with Mexican American students. *College Student Journal*, 29, 221-226.
- Walton, S.J. 1990 Stress management training for overseas effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 507-527.
- West, M.A., Nicholson, N. & Rees, A. 1987 Transitions into newly created jobs. *Journal. Occupational Psychology*, 60, 97-113.
- Zborowski, M. 1952 Cultural components in responses to pain. *Journal. Social Issues*, 8, 16-30.